

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 865 号 平成 27 年 1 月 19 日

評価経済（2）

私達は、「働く」というのはどこかの会社に「就職」する事と考えていますが、岡田斗司夫氏は「人間が働くというのは、必ずしも就職とは限らないはずだ」と述べています。

そして、かつての日本は、定年は今よりもっと早かったし、農業等の家業に従事したり、工事の日雇いや店の手伝いといった仕事に就いている人も少なくなかった。また、女性も、専業主婦として、家事や子育てに専念している人が多かった。このように、かつての日本には、人口のほとんどが「働いている」けれど「就職していない」という時代があったと指摘しています。にもかかわらず、今は、「働く」＝「就職」という考えにとらわれ過ぎている、というのが岡田氏の指摘です。

確かに「働く」と「就職」は同じではないとはいえ、働き方の多様化という触れ込みの中で非正規労働者は増え、多くの若者達が就職したくても出来ないという現実、日本の社会を不安定化させている大きな要因の一つとなっています。

岡田氏は、会社が若者の採用に消極的な原因について、

- ・企業の寿命が5年を切り、これからはずっと安泰な会社は存在せず、半年先の未来が予測不能の時代になった
- ・新人を雇って仕事を教える余裕がない。面倒な仕事しかもう残っていない、固定給を払っている人達でやり繰りするので精一杯の状態にある
- ・怖くて人を増やせない。新しいアイデアが出る度に、一つの産業や業態が潰れたりする

と分析しています。そして、これから先は「普通に大学を出たら、普通に就職できる」なんて夢にも思っただけとはいけないと述べており、若者達の苦勞が偲ばれます。

ではどうすればよいのでしょうか。

岡田氏は、「愛されニート」という生き方もあるのではないかと述べています。何やら皮肉っぽく聞こえますが、決してそうではないようです。氏は、「愛されニート」というのは大正から昭和初期にかけての居候に近い生き方だが、コストも最も低く抑えられて、ストレスも最小限で済むと評価しています。

もっとも、それは家族の性格や関係性がポイントなので、岡田氏は、仮に本人が「愛されニート」を望んでも無理な場合があるとしています。まあ、大抵は無理なんじゃないかと私は思いますけどね。

「愛されニート」というのは、極論のように聞こえるかも知れませんが、これが

らは「かわいげ」のある人は今よりもっと重視されるようになると思います。つまり、ネット社会の中で人とのつながりは無限になり、それは「助けてもらえる可能性も」無限に広がって行くからで、その際、「かわいげ」のある人は色んな人から沢山のサポートを受けられるようになるというものです。逆に「かわいげ」の無い人は、自分の力で生きて行かなければなりません。他人との人間関係を作る事が苦手な人、あるいはそういうものは必要ないと考えている人は、結局、自分でお金を稼いで、自分で自分を助けるしかないという訳です。

他人との関係を作れない人は、頼れる親に最後まで依存する事になり、一方、ネット等で繋がりをどんどん強化出来る人は、親や地域からも自由になれる、というのはネット社会がもたらす一つの社会現象といえるのかも知れません。

それでは「かわいげ」のある人になるにはどうすればよいのでしょうか。

岡田氏は、沢山人から「かわいげ」があると評価されるためには、ボランティア等の奉仕活動も含め、沢山の仕事（就職とイコールではありません）をしていく必要があると述べています。

岡田氏は「50種類の仕事をしよう」と提唱しています。

何十個もの仕事を同時にこなす事は不可能のように思えますが、岡田氏は、自分が今やっている仕事の中には儲かる仕事も有れば儲からないものもあり、その多くは職とは呼べないものかも知れないが、そうした沢山の仕事をまるでサーフィンのように次々として行く事で、仕事の量や収入、そして評価の安定を目指しているとしています。

また、岡田氏は、「単職」に就くのが「就職」なら、「仕事サーフィン」こそが「多職」の正体であり、「単職」に就く事が正社員なら、「多職」に就く人は「仕事サーファー」だと呼んでいます。

岡田氏は「僕たちは就職しなくてもいいのかもしれない」と述べている訳ですが、それは、どこかの会社に就職する事だけが是ではないし、そもそも、多くの若者が正社員にはなれない時代が到来しているのだから、そんな事に価値を求めても仕方がないのではないかという事だと思います。

私も会社に就職する事だけが是だと思っている訳ではありませんが、そうはいつでも、自分の生活を支えるだけの（つまり自立出来る）しっかりとした仕事に就いて欲しいとは思っています。

岡田氏は、既に「単職」が良いという時代は過ぎ去ってしまい「多職」の時代になっており、その時代を乗り切るには「仕事サーファー」になる必要があると述べていますが、そうになると、人と人との関係性は今後増々重要になって来るといわなければなりません。

ただ、「仕事サーファー」になるというのは、そんなに簡単な事ではないはずで、まず、色んな事に興味を持ち、何事にも積極的にチャレンジする能動的な生き方が

求められます。それは、微温的な生き方を否定しなければ難しいでしょう。そして何より、人付き合いが苦手な人は、これから先一体どうなるのだろうと心配になります。

「お金を動かさずに経済を回す」

つまり、「評価」を媒介としてモノやサービス、お金が交換される社会、こうしたサイクルが評価経済の完成イメージのようです。

経済に素人の私としてはなかなか想像し難い社会であり、お金ではなく人が人を評価するという非常に不確実なもので経済が回って行くという事について、社会の不安定化を招くのではないかという懸念はどうしても拭えません。ただ、正社員として会社に就職する事が非常に困難になる中、就職に対する価値観が大きく変化しつつある事は確かであり、そうした時代の変化から目を逸らす事が許されない事は、確かだと思っています。(塾頭：吉田 洋一)